



Title	『アイヌ語ロシア語辞典』のアイヌ語話者に関する情報
Author(s)	阪口, 諒
Citation	北方人文研究, 14, 123-134
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80898
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_09_Sakaguchi.pdf



『アイヌ語ロシア語辞典』のアイヌ語話者に関する情報*

阪口 諒

(千葉大学人文公共学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

要旨

本稿の目的は、『アイヌ語ロシア語辞典』(Dobrotvorskij 1875)の中のアイヌ語話者の居住地や経歴を明らかにすることである。アイヌ語話者に関するドブロトヴォルスキーの記述は断片的であり、大半の話者の居住地は明らかではない。同時代の史料と突き合わせることで、話者の居住地やその移動を明らかにできるだけでなく、アイヌ語資料としての辞書の可能性を高めることができる。ドブロトヴォルスキーと親しかったカシトゥルというアイヌ男性を例にすれば、同時代の他の史料から、1870年代に至っても久春内の近くコミシラロボ(小茂白)で家族と暮らしていたことが確認できるが、カシトゥルの長女と長男は、1860年頃のウシヨロ(鵜城)場所の人別帳に現れている。そのほか、他の資料と比較して辞典のアイヌ語が正確であることは、ロシア側、日本側の人名記録を修正する一助になると思われる。

はじめに

『アイヌ語ロシア語辞典』(Dobrotvorskij 1875、以下では『辞典』)にはアイヌ語の語彙・例文だけでなく、樺太アイヌの名前が数多く含まれている(男性72名、女性26名)。付録で言及された人物の中には居住地が分かるものがあるが、見出し語に掲載された人名の多くには性別以外の情報が付加されていない。筆者は阪口(2019)第4節において、『辞典』の例文を人称の観点から分析し、人称代名詞 *ciokay*、人称接辞 *ci-/as, in-*(それぞれ他／自動詞主格、他動詞目的格)を用いるという点で東海岸方言と大きな差異は見られない(むしろ西海岸北部と差異がある)ことが確認できた¹⁾。話者の経歴をまとめることは、資料の地域的な偏りが大きいアイヌ語樺太方言の地域的な特徴やその背景を探るうえで重要な課題であると考えられる。本稿は日露共同領有期～日本領期に久春内に居住していたアイヌ語話者に焦点を当て、その経歴や、地域的なつながりを考える一つの試みでもある。

また、本稿は『辞典』が同時代の人名記録を修正する情報ともなりうることを示す。短期間の滞在で作成された記録やカタカナで筆記された記録に比べると、『辞典』のアイヌ語は表記が正確である。同時代の日本側のカタカナによる記録では、アイヌ語の音節末の子音は書き表されないか、他の読みの可能性のある表記となっている。キリル文字は、カタカナに比べれば書き表せる音節が多

* 本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号20J11234)による成果の一部である。

1) 例文に出てくる人名からクスナイ(久春内)周辺で採録されたものが多いと推測される。ドブロトヴォルスキーのいたクスナイの診療所は1869年には存在が確認できる(『辞典』付録68)。

く、本来のアイヌ語を推定することは比較的容易である（ただし、どの表記においてもアイヌ語の i と e、u と o の区別には曖昧な点が残る）。『辞典』の著者であるドブロトヴォルスキーはアイヌの間で5年を過ごし、アイヌ語の聞き取りにおいては同時代のロシア人の中でもかなり正確である。『辞典』に現れる人名を整理することで、同時代の史料の翻刻ミスを減らすことにも、人名のアイヌ語としてのより正確な音を再現することにも貢献できると思われる。

なお、アイヌの名前はアイヌ語の音韻に合わせたカタカナ表記を用いるが（アイヌ語に清濁の区別はないため清音で統一した。ただし、日本側の記録でもともとカタカナ表記されている人名は「」で括って原表記で示した）、アルファベット表記はキリル文字を転写したものである（そのためカタカナ表記とアルファベットは必ずしも一致しない）。地名表記は基本的に史料に従い、その後の（ ）内に日本領時代の名称を加えた²⁾。

1. 19世紀後半～20世紀初頭のサハリン島

サハリン島の北緯50度以南は主にアイヌが居住する地域であったが、1850年代にはすでに樺太アイヌの多くは漁場労働者となっていた。1846（弘化3）年にサハリン島へ渡った松浦武四郎の記録では樺太アイヌが労働力として漁場に集められ、酷使されている様子が報告されている。1850年代は、サハリン島の領有を巡って日本とロシアの間で政治的交渉が進行していた時期であり、ロシアもサハリン島南部へ進出を開始していた。本稿で取り上げるカシトゥルの居住する小茂白付近のクシュンナイ（久春内）・ナヨロ（名寄）へは、1857（安政4）年にロシア人が入植をはじめた。この際には、川を挟んでロシア人と箱館奉行所の役人が対峙する格好で、睨み合いと話し合いが行われている。ブッセ（2003）には、このときにアイヌが日露の間で右往左往する状況が詳しく記録されている。この地域の有名な長老であったセトクレロ Setokurero（シトクレランやシトクルランケとも）は、ロシア人と和人の間を比較的自由に渡り歩いているが、松浦武四郎やルダノフスキーが記録するように、1850年代後半には日本の影響下でかつての威勢を失っていた（Latyshev 1993：263-264；松浦1969：763-764）。なお、『辞典』の著者ドブロトヴォルスキーはこのもっと後にセトクレロを訪れている³⁾（『辞典』付録70）。

1855（安政2）年には、幕府はサハリン島（北蝦夷地）を含む蝦夷地の直轄化を行う（第二次蝦夷地直轄）。そして、1859（安政5）年には越前大野藩が幕府から漁場開設の許可を得て、アイヌの人口も多く⁴⁾、ニシン、マスも多く獲れる北方のウシヨロ（鵜城）に会所を設置し⁵⁾、ロシアの進出に対抗してアイヌの「撫育」を強化しはじめた。1867（慶應3）年の「カラフト仮規則」により島の共有が確認されるまでの間、日本もロシアも実効支配域を急速に拡大していたが、1862（文久2）年には、ウシヨロに居住するアイヌのトホコンベ Tohkombe（トコンベ）⁶⁾がロシア人の元へ逃亡する事

2) 日本領時代（1905～1945年）の地名を加えたのは、その地名の多くがアイヌ語由来であり、幕末の記録に現れる地名と共通する場合が多いためである。また、現在のロシア語地名はそれ以前の地名との連続性が少なく、また地名の指す地点・区域が必ずしも一致しないため、本稿では採用していない。

3) なお、『辞典』の「辞書部」には1871年1月7日没とある（『辞典』289）。

4) 北蝦夷地ウシヨロ場所経営帳簿（註4参照）内の、1862（文久2）年のアイヌ人別帳（註4参照）によると、ウシヨロ場所の家数は23軒で、179名が居住している（東2017：29）。

5) これに伴って北蝦夷地ウシヨロ場所経営帳簿『北蝦夷地用』（東2018-2020）が作成されており、ウシヨロのアイヌの状況を知るうえで、重要なものとなっている。

6) 『辞典』にトホコンベと記録され、ロシア語を話すこと、日本人と付き合いがたがらないことや、ニヅフ

件「トコンベ一件⁷⁾」(名称は菊池 1989 による)が起こり、アイヌの居住地は日本領であるという前提が崩壊する。1869 (明治 2) 年に大野藩はウシヨロ場所を引揚げている。ドプロトヴォルスキーが「サハリン分遣隊の指揮官デ=プレラドヴィチは、今年(慶應四年?)になってアイヌの日本人支配からの開放措置をとったが、それはほとんど成功せず、アイヌたちは以前と同様に日本の部落で働いている」(秋月 1994: 180 より日本語訳を転載)と記述するように、1860 年代後半においても(特に久春内以南の)樺太アイヌは日本の経済的支配下に入っていたようである。

2. 『辞典』の情報提供者の一人であるカシトゥルを例に

カシトゥルとその家族は 1876 年に行われた国勢調査である Perepis' (1995 [1876]) にも現れる。妻、息子、娘なども『辞典』に登場する。さらに、Perepis' (1995 [1876]: 18) から、カシトゥルの家族はクスナイ(久春内)から 3 露里北のコミシラロポ Komy-siraropo (小茂白) に居住していることが分かる。樺太千島交換条約によってサハリン全島がロシアの支配下に入っすぐ後の記録である⁸⁾。家族状況が分かりやすくなると思われるので、Perepis' (1995 [1876]: 18) に掲載された居住者の一覧を最初に提示する。この村は 1 軒の家屋からなっているので、この村の成員は全員カシトゥルの家族であると思われる。なお、コミシラロポの次はカンチオマンテ Kantsiomante (前述のセトクレロの三男) が村長となっているナヨロ Najoro である。松浦武四郎による「西浦人別帳写」の写しのクシュンナイ(久春内)の欄には「カナシュワンテ⁹⁾」と「カシトル」の二つの家族が見られるが、「カシトル」の家族としては「ヲソマツテ」しか記述されていない。『辞典』、国勢調査と突き合わせることで「ヲソマツテ」は、例えば「チヲコツテ」の誤写である可能性を指摘できる。

男性

カシトゥル Kasturu
トイラハク Tojrakhku
チウカランキ Tsiukaranki

女性

チオコホテ Tsiokokhte
テタニシラマ Tetany-sirama

少女

サヌンカランケマ Sanun-karankema
キンカハチャ Kynkakhtsa

風の辮髪をしていること、ニブフ女性と結婚したことなどが書かれている(『辞典』付録 84, 87)。

7) トコンベ一件とは、1862 (文久 2) 年、サハリン島西海岸のウシヨロ場所内ウエンルイサン村(円度)に住んでいたアイヌのトコンベが、日本の番人・定吉から受けた暴力をきっかけに、シルトッタンナイ(ポロコタンの南方)のロシア人居住地へ逃げ込み、同地の隊長ロシア人ジャチコフ D'yachkov が保護したという事件である。その翌年、ウシヨロ場所のアイヌ 18 名が、日本を見限り、ロシアへの服属を求めて居住村を退去するという出来事も起きている。この事件の経過や意義に関しては秋月(1994)や菊池(1989)、檜皮(2006)、東(2017)が詳しい。

8) なお、亜庭湾沿岸の樺太アイヌは北海道へ移住した後なので、1876 年の国勢調査ではトゥルマイ Turumaj (鳥舞) からクリリオン Kril'on 岬(西能登呂岬)までアイヌは住んでいない。亜庭湾ではハラハブネ Kharakhpune (洞舟)の村にアイヌの家屋が 1 軒あるのみである。

9) セトクレロ(シトクレラン)の三男。安政 3 年 6 月の報告では「カナシウワンテ」(東京大学史料編纂所編纂 1972 [1922]: 268)とある。『辞典』「1876 年国勢調査」などから、アイヌ語としてはカンチオマンテ Kanciomante と推測される。

まず男性の欄でカシトゥル（カシトゥル）の後に続くトイラハク、チウカランキはカシトゥルの息子である。女性の欄ではチオコホテ、テタニシラマの名があり、さらにその下の少女の欄にサヌンカランケマ、キンカハチャの二人が見える。

カシトゥルやその子供たちは『辞典』の付録に何度か登場する。カシトゥルは『辞典』の例文にも登場するほか、見出し語にはワハカ セーセヘカ スー Vakhka sésekhka su 「サモワール」（文字通りには「水・を沸かす・鍋」というカシトゥルが即興で作り出した言葉が含まれている（『辞典』47）ように、カシトゥルはドプロトヴォルスキーと親しい関係にあったことが想像される。

上の国勢調査の女性の欄に見られるチオコホテ、テタニシラマ、サヌンカランケマはそれぞれ『辞典』で、チュコホテ Chúkokhte（『辞典』427、付録64）、テタニシラマ Tetánistrama¹⁰⁾（『辞典』358）サヌンカランケマ Sanunkoránkema（『辞典』284）とある。チュコホテはカシトゥルの妻のようであるが¹¹⁾、チュコホテ以外は、女性の名前とだけ記録されており、カシトゥルとどういう関係にあるのかは明らかではない。

なお、『辞典』によれば、カシトゥルの長女はケマストウンケマ Kema-sutúnkema（『辞典』付録86）であるが、この国勢調査には長女の名前は見えない。その理由は後述する。また、おそらく国勢調査当時もっとも幼かったであろうキンカハチャは『辞典』には見つからない。ドプロトヴォルスキーがいた当時、生まれていないか、まだ名前が付けられていなかったのではないかと思われる¹²⁾。以下では、1875年までの日露共同領有期におけるカシトゥルと子どもたちについてみていく。

3. 日露共同領有期（1867～1875年）

3.1. カシトゥルと息子たち

次に、カシトゥルの息子たちに関する記述を『辞典』の付録から引用する（太字は筆者）。

チカイ（Chikàj, Чика́й）¹³⁾ 岬の近くで、1871年5月26日、私は一日に10頭の熊を見かけた（その内の一頭は、私たちが殺した）。サンバクシ・アイヌ（Sámbakus-ájnu, Сámбакусъ-áйнy）¹⁴⁾ は、槍と弓をもって二人で舟に乗って熊獵に出かけた（しかし、一頭も仕留められなかった）。カシトゥルはこの年3頭の熊を殺した（その内の1頭は威嚇の矢に自ら当たった）。（ドプロトヴォルスキー 2019：134）

カシトゥルは1872年4月にギリヤーク人と息子のトイラフク（Tójrakhku, Тóйрахку）とともに、ボートに乗って、熊用の槍で2頭のトドを襲った。一頭は仕留めて引き上げることができ

10) 『辞典』で tr で表されるのは、アイヌ語の r に相当する音である。

11) 『辞典』付録64頁の該当箇所は「カシトゥル・チュコフテ（Kasiturù Chúkokhte, Каситурү Чүкохте）の妻」（ドプロトヴォルスキー 2018：87）と訳されているが、「カシトゥルの妻チュコホテ」だろう。

12) 樺太アイヌも子供が大きくなるまで名前を付けないのがふつうである（坪井 1907：268）。

13) チーカイ岬は、泊居郡泊居町のチーカイのことで、アイヌ語ではチイカウシ ciika'usi（服部 1969：40）。佐々木（1969：94）にチーカペスポ（チーカイ岬）として挙がっている場所である。

14) サンバクシ（サンバクシアイス）は熊狩りの名手であったようである。『辞典』のアイヌ語例文からは彼の活き活きとした姿が感じられる。また、『辞典』に収録された論文や、ピウスツキの記録には彼の武勇伝が記述されている（ドプロトヴォルスキー 1996：88；ピウスツキ 2018：613）。ずっと後の千徳太郎治も「泊居の酋長にはサンバクサイヌ氏」（千徳 1929：17）と記載しており、かなり名の知れた人物であったようである。

だが、もう一頭は逃げた。私がいた頃の未曾有の壮挙であった。というのは、アイヌは岸に這い上がったトドしか仕留めないからである（長い槍で）（ドブロトゥヴォールスキー 2019：134）

トイラフク（Tójrakhku, Тóйрахку）は、カシトゥル（Kasiturù, Каситурү）の長男である。彼は、ミトロファン（金持ちのバカ息子）と呼ばれると、腹を立てる。（ドブロトゥヴォールスキー 2019：141）

1850年代の場所図・古地図の分析から、ギリヤーク人（現在ではニヴフ）は西海岸では北緯50度より北に居住する（関根 2012：28）とされるが、両者の間にはこの時代においても関係が継続しており、交易や共同での猟も行われていたのかもしれない。これには「カラフト島仮規則」後にアイヌがロシア人やニヴフとも自由に交易できることになったことが背景にある可能性がある。

末息子のチウカランケも『辞典』付録68頁に見られる。

カシトゥル（Kasituru, Каситурү）の末息子のチヴカランケ（Chivukarânke, Чивукаранке）が胸の痛みを訴えた時、女まじない治療師が首や胸を噛んで、ハナ（khanà, ханà）あるいは、ハナーアラカ（khanà-araka, ханà-арака）という病気を吸い取った。この病気では、血を出してしまわないと甚だ危険である。（ドブロトゥヴォールスキー 2019：122）

上の記述から、チウカランケはクスナイ（久春内）にあったドブロトゥヴォールスキーの診療所を訪れていたことが確認できる。また、日本側の会所にも出向くこともあったようである（千徳 1929：24）。チウカランケに関しては、ロシア領時代、日本領時代に記述が残されているので、第5節でまとめて取り上げる。

3.2. ケマストウンケマとトイラハク

次にカシトゥルの娘に関する『辞典』の記述を見たい。先ほどの国勢調査には見えなかったケマストウンケマに関する記述である。このほかにカシトゥルの娘に関する記述は見当たらない。

28. ケマ・ストウンケマ（Kema-sutúnkema, Кема-сутúnкема）はカシトゥルの長女である。彼女は、「いたずらをするために」たえずクスナイ（Kusunaj, Кусунай）の日本人のところへ行き、そこから米や魚をもってきた。日本人との間に二人の子供を産んで、その後ウスリ（Usuri, Усури）のアイヌのところへ嫁に行った。（ドブロトゥヴォールスキー 2019：141）

クスナイは久春内のことであるが、ここは日露の勢力が川を挟んで対峙していた場所であり、日本人（ここでは和人のこと）とも経済的に深い関係にあったことが推定される。コモシラオロ（小茂白）は春はニシン、秋はマス漁のために日本側から多数の漁夫が出向いていたところでもある（秋月 1994：170）。ウスリとあるのはウショロ（鵜城）である。ウショロ場所は、北緯48度50分付近に位置し（ライチシカ村のみやや南に位置する）、ウエンルイサン（宇遠）村、フレヲチ（幌千）村など7つの村から構成される。

実際、1862（文久2）年ウショロ場所アイヌの人別帳を見るとケマストウンケマと非常によく似た名前の「ケマシトンケマ」の名前が見つかる。それによれば、ヲタフニ村¹⁵⁾（鱒鱒漁業場）の惣小使

「ランハヲトエ」(ライチシカ村から移住、1859年の「撫育渡方覚」ではライチシカ村(東2019:9))の家に組み込まれている。ライチシカはコミシラロボから約50km北へ行った所にある。

「ウタレ女 ケマシトンケマ 21 此者ランハヲトエ妾女¹⁶⁾也」(東2018:25)

なお、同じ家に、「ケマシトンケマ弟 トイラツク 15」(東2018:25)が見える。トイラハクは先ほど見た国勢調査や『辞典』に見えるカシトルの長男である。姉のケマストウンケマとともにライチシカ、さらにヲタフニへ移ったのだろう。ただし、トイラハクが移住したことについての情報は『辞典』にはない。

松浦武四郎による「西浦人別帳写」のクシュンナイ(久春内)の欄には「カナシウワンテ」(カンチュマンテの誤記か¹⁷⁾)と「カシトル」の二つの家族が見られる。「カシトル」の家族としては「ヲソマツテ」だけが残っている様である。「カシトル」には傍線が引かれているが、これは「強制出稼ぎに遣られている家。または家族がとられている家」(松浦著・秋葉翻刻・編2001:272)だという。そこからずっと北にあるラエチシカ(来知志)の御土産取の「ランハチウトエ」¹⁸⁾(36歳)の家にウタレ女¹⁹⁾の「ケマシトンケマ」(14歳)とその弟(8歳)が見られる。「ランハチウトエ」という名前はウシヨロ場所の人別帳にある「ランハヲトエ」にほとんど一致する。また、それぞれの年齢も一致する。1862(文久2)年ウシヨロ場所アイヌの人別帳で「ケマシトンケマ」は21歳、「トイラツク」は15歳なので、松浦氏が写した人別帳はその7年前の1855(安政2)年頃のものであると思われる²⁰⁾。「ランハヲトエ」は、1862(文久2)年人別帳ではヲタフニ村居住の惣小使となっているが、1859(安政6)年にはライチシカ村居住の惣小使であった。「北蝦夷地土人人家数船数出産物等書上」(東京大学史料編纂所編纂1972[1922]:261-269)では「西浦人別帳写」と同じくラエチシカ(来知志)の御土産取とある。

「ケマシトンケマ」は漁場で働き、高30俵(「土人給料勘定」出稼ぎがある女性22名のうち最も「高」が高い3名に入っている)となっているが、「トイラツク」は「土人給与勘定」に名前が見えず、漁場で働いたという記録は見当たらない。安政6年の「撫育」(東2019:9)では「トイラツク」は、「ランハヲトエ家内」として9斗6升=12俵の米を渡されている。この時、「トイラツク」は12歳くらいであったと推測されるが、年少者であるため、「給料勘定」の対象となる「働土人」には含まれておらず、非「働土人」を対象とした「撫育」(東2019:6)に名前が掲載されている。そのため、移住時点では漁場労働者とはみなされておらず、トイラハクがなぜ姉とともに(のちに姉を頼っ

15) 服部(1969:29)にあるウェンルエサン wen ru'esan(宇遠)とウシトモナイボ 'ustomo naypo(牛苦、鵜城)の間にあるオートッポニ 'ootuponi(オートポニ)がヲタフニだと思われる。

16) 日本語の妾からイメージされるものではなく、おそらくアイヌ語でボンマハ ponmah(小妻)と言われるものである。ボンマハは、最初の妻よりも簡単ではあるが、正式に結婚したものである(Ohnuki-Tierney 1974:79; 大貫1979:102)。

17) 安政3年6月の報告では「カナシウワンテ」(東京大学史料編纂所編纂1972[1922]:268)とある。

18) 安政3年6月の報告では「ランハヲトエ」(東京大学史料編纂所編纂1972[1922]:267)とある。ランハチウトエはランハヲウトエの誤記かもしれない。

19) 「ウタレ」の本来の意味は、未婚で親族でない家主の世話になっている者(東2018:13)だという。先の『辞典』の記述などからもケマストウンケマは結婚しているのだと思われる。

20) 秋葉實氏は幕府直轄になって作成された「安政三年人別」と推測している(松浦著・秋葉翻刻・編2001:273)。

て移住した可能性もあるが)ライチシカ、ヲタフニへと移住したのか定かではない。姉のケマストゥンケマの婚姻に伴った移動という可能性が高いのではないだろうか。日露双方の監視下にある久春内周辺から相対的に生活条件の良い土地へ移ったという事だったのかもしれない。

『辞典』の記事と「1876年国勢調査」からトイラハクはコミシラロボ(小茂白)に帰還していることが確認できる(ケマストゥンケマはそのまま「ヲタフニ」に留まったのかもしれない)。トイラハクは、ドブロットヴォルスキーがサハリン島に来る前か、サハリン島にいた時期(1867年～1872年)に帰還したのだと思われる。ウシヨロからの帰還の時期は不明であるが、大野藩が1869(明治2)年にウシヨロ場所を引き揚げたときに帰還した可能性が最も高いのではないだろうか。なお、1860年代でも、この地域のアイヌは自立性を持っていたようで、1867(慶応3)年6月、ウシヨロ場所のアイヌが会所での雇用労働をすべて拒否するというボイコット事件が発生している(東2017)。ピウスツキ(2018:239)も「ウソロ地区」のアイヌは、日本人の下で農奴的隷属状態にはあったが、短期間に過ぎないと記している。

1875年の樺太千島交換条約によって、サハリン全島がロシア領となるが、その直後の1876年の国勢調査Perepis'(1995[1876]:27)では、「コスナイ Kosunaj(久春内)から最大100露里のところに、26の家屋(ユルタ)からなるアイヌのウスロ Usuro(鵜城)村がある。住民(の数)は一国勢調査が行われていないので—不明である。彼らは、チスロルスキー(Chsurorskij)の長であるニプリランキ Niburi-ranki と3人の補佐、ニシロ Nisiro、センクラ(ハ? ²¹⁾) Senkurav、パニシトランキ Panys'-topanki に従っている²²⁾」(拙訳)とあるのみで、国勢調査の対象から外れている。なお、ここでウスロ(ウシヨロ)の長老として挙がっているニプリランキ、その補佐のニシロ、センクラ(ハ?)、パニシトランキはそれぞれ、ウシヨロ場所経営帳簿『北蝦夷地用』に「ノホリランケ」、「ニシロ」、「センクラ」、「ハニシトランケ」(ハユシトランケとも)とある人物だろう。東(2018)表6からは、「ノホリランケ」は1862年人別で32歳、ヲタフニ村の乙名であること、「ニシロ」は1862年時点で、20歳。ライチシカ村の惣小使「ランハマトエ」の息子であること、「センクラ」は1862年時点で、35歳、ウエンルイサン村の土産取であり、「ハニシトランケ」は1862年時点で、32歳、ヲタフニ村の土産取であることが確認できる。

4. ロシア領時代(1875年～1904年)

「1876年国勢調査」以外のロシア領時代の資料で、カシトゥル、ケマストゥンケマ、トイラハクは確認できていない。しかし、チウカラнке(～キ)に関しては、ピウスツキによる「父祖伝来の川」(テン獵を行う排他的権利を有する)に関する資料に名前が記されている。チウカラнкеはカシトゥルからエトンノナイ Etonnonay(久春内村の江戸内川か)の権利を継承していると考えられる。なお、この権利は「長男が親の世話をする代りに相続することになっている」(大貫1979:103)が、長男が何らかの理由で集落を去ることも珍しくなく、他の息子の1人が男の家を相続し、その見返りに両親を世話するので(Ohnuki-Tierney 1974:78)、トイラハクがこの権利を継承できない事情があったのかもしれない。

21) カタカナによる記録で「センクラ」とあるところを見ると、キリル文字の в (v) で表される音は、(音節末の w ではなく)日本語母語話者に聞き落されやすい語末の h ではないかと思われる。

22) 同時代のカタカナによる史料では濁点や半濁点が表記されていないことがあり、音の推測には制約があるが、キリル文字による史料との突き合わせからノ(～ヌ)プリランケ No(～u) puriranke、ニシロ Nisiro、センクラ(ハ) Senkura(h)、パニシトランケ Panistoranke ではないかと推測される。

Komosiraro Rodovoyu rechkoyu ajnu Tsiukaranki schitaet r. Etonnonaj.

コモシラロ アイヌのチウカランキは父祖伝来の川をエトンノナイ川と考えている。

(原文は田村 2017: 95 より転載、日本語訳は筆者による)

トイラハクは前述の「1876年国勢調査」でコミシラロポ(小茂白)に居住していることが確認できるので、ピウスツキの調査までに亡くなっていたのかもしれない。千徳太郎治によれば、チウカランケはコモシラロロ(小茂白)の村長で、そこにはその家一軒だけであったという(千徳 1929: 17-20)。そして 1899(明治 32)年には 60 歳だったという(千徳 1929: 25)。だとすれば、1862 年に 15 歳であったと推定されるトイラハクよりも年上ということになる。千徳太郎治の記録するチウカランケの年齢がどれほど正確なのかは分からないが、推定年齢がドプロトヴォルスキーの「カシトゥルの末息子 mladshij syn Kasituru」との記述とも国勢調査の掲載順とも合わない理由は、母親が違うということも考えられるかもしれない(ただし、1876 年の国勢調査では誰が母であるかは不明である)。

なお、チウカランケには妻が二人いて、本妻は「ウトンカラ」でポロアントマリ(大泊)の有力者の娘、小妻は名寄の「ルルクランケ」の姪であったという。その弟はチウカランケの甥にあたる「ニシトランケ」で、ライチシカににいるという(千徳 1929: 20)。ここでも、久春内とライチシカ(来知志)の関係を見出せることは興味深い。当時の久春内のアイヌがライチシカなどサハリン島南部北西海岸とどれほどの交流があり、それが時代と共にどれほど変化したのかは明らかではないが、19 世紀後半から 20 世紀初頭の北西海岸のアイヌにとって久春内までは行動範囲に入っていたようである²³⁾。

なお、1909(明治 42)年ころに日本領となっていた樺太を訪れた小川運平(柳坡)は久春内にて「コモシラボのチウカランゲ(六十才以上)」から話を聞いたり家宝を見たりしている(小川 1929: 144, 146, 147, 151)。チウカランケは、日露戦争の時にロシアが久春内から真縫に通じる道を作るときに指導者になったという(小川 1929: 146)。小川は久春内からの移動時に対雁アイヌの樺村勇左衛門²⁴⁾や太田幸之進(サッセルシク Sasserus'ku)²⁵⁾の犬ぞりで移動している(小川 1929: 138)。日露戦争の前後には、小茂白にも対雁アイヌ(ほとんどは亜庭湾沿岸地域出身)が帰還している。葛西(1975 [1928]: 113 丁左)も北海道より帰還した者(=対雁アイヌ)が多いとしている。なお、小茂白のアイヌはライチシカ湖でマス・イトウの漁を行っている(葛西 1975 [1928]: 115 丁右)な

23) 前述のように、『辞典』の例文の人称は北西海岸方言と差異が見られるほか、北西海岸(ライチシカ～旧日露国境線)のアイヌが久春内以南のアイヌを「自分たち」でないと意識していたという、北西海岸出身の話者による証言もある(服部 1969: 39; 大貫 1979: 96)。

24) 樺村勇左衛門は小川(1929: 153)によれば、「樺太大泊に生れ石狩ライサツに長じ三十五年〔註一 1902 年〕樺太に來り、三十八年〔註一 1905 年〕西海岸コモシラボに住み、現に彼地に住み、久春内にて吾と面談更に三日、犬橇に御者たり、然らば、勇左衛門は、ユートロマーカの甥にして、長男にあらず。」; 坪井(1907: 481)によれば、「西海岸クسنナイの北に方たるバイカイシャクシ」に居住していたという。そして千徳(1929: 42)によれば「樺村勇左衛門對雁村に於ける共救組合の幹部にして八年前〔註一 1921 年〕に久春内(コモシラロロ)に於て没せられた」という。

25) ローマ字表記はピウスツキ(2018: 229)に従った。小川(1923: 154)によれば、「太田幸進と云ふ、本名はサーセルシク(四十二才)三十六年〔註一 1903 年〕樺太に來り、三十八年石狩に返り、三十八年三戸のアイヌと、樺太に渡り、現にコモシラボに住す」という。千徳(1929: 35)によれば久春古丹の首長トレバンケアイヌの三男で、「サッセル、シク、日本名太田幸之進」という。

ど、依然としてライチシカと関係があることが伺える。この後、カシトゥルの一家がどうなったのかについては定かではない。

終わりに

以上、カシトゥルとその家族についていくつかの史料を組み合わせ、その動きを追ってきた。日露共同領有期には、樺太アイヌの多くが労働力としてすでに漁場で酷使されるという状況にあり、クスナイ（久春内）周辺に暮らすカシトゥルにとって、サハリン島における日露双方の実効支配強化は相当に影響を及ぼしていたのではないと思われる。長女ケマストンケマの動きを見るだけでも、和人の元へ通い、米や魚をもらってきたり（子供も二人生まれている）、後にはライチシカ（来知志）のアイヌと結婚し、ウシヨロ場所の漁場労働をしたり（弟トイラハクも同じ家に居住）と、かなりの移動を行っている。その弟のトイラハクは後にコミシラロボ（小茂白）に帰還しているようだが（大野藩がウシヨロ場所から引き揚げた時か）、1871年にはそこでもニヅフと共同で漁を行ったりと、サハリン島上には国境が引かれておらず、相互に行き来できていたことが伺える。また、サハリン全島がロシア領になった直後の1876年国勢調査を除いてトイラハクの話は不明だが、カシトゥルの跡をチウカランケが継ぎ、コモシラロロ（小茂白）の村長となっていたようである。日露戦争の前後には1875年に北海道へ移住していた樺太アイヌ（対雁アイヌ）が久春内周辺にも数多く移り住むようになったようであり、樺太各地を故郷とするアイヌが暮らす場所となっている。カシトゥルとその家族を追うことで、かつて日露の勢力が対峙したクスナイ（久春内）周辺と、ロシアへの対抗上、大野藩がアイヌへ「撫育」を行い、実効支配を強化していたウシヨロ場所との繋がりなど、これまであまり知られていなかった一面が見えてきたように思う。また、アイヌ語の人名に関しても、諸史料で差異が見られるが、『辞典』の表記はロシア側、日本側の記録を修正する一助となるだろう。

参考文献

- Dobrotvorskiĭ, M. M. (1875) *Ainsko-Russkij Slovar'* Kazan.
- Latyshev, B. M. (1993) *Ajnskij slovar'* N. V. Rudanovskogo. 村崎恭子（編）『サハリンの少数民族』（文部省科学研究補助金（1990～1992）国際学術研究（共同研究）研究成果報告書）255-276.
- Ohnuki-Tierney, Emiko (1974) *The Ainu of the Northwest Coast of Southern Sakhalin*. Holt, Rinehart and Winston.
- Perepis' (1995 [1876]) Perepis' ajnov Yuzhnogo Sakhalina 1876 g., provedennaya A.Ya. Radkovskim. *Istoricheskie chteniya. Trudy gosudarstvennogo arkhiva Sakhalinskoj oblasti* 1: 6-27.
- 秋月俊幸（1994）『日露関係とサハリン島—幕末明治初年の領土問題』筑摩書房.
- 東俊佑（2017）「第1章「トコンヘ一件」再考—北蝦夷地ウシヨロ場所におけるアイヌ支配と日露関係—」白木沢旭児（編）『北東アジアにおける帝国と地域社会』27-60. 北海道大学出版会.
- 東俊佑（2018-2020）「土人給料勘定」のしくみ（Ⅰ）～（Ⅲ）』『北海道博物館研究紀要』3-5.
- 小川運平（1923）『日本ト大陸』北駿學會.
- 葛西猛千代（1975 [1928]）『樺太土人研究資料』私刊.
- 菊池勇夫（1989）「幕末日露関係のなかの樺太アイヌ」『日本歴史』497: 48-65.
- 阪口諒（2019）「樺太アイヌ語における人称のクラスと主格目的格人称接辞」『北海道言語研究』17: 1-18.

- 関根達人 (2012) 「場所図・古地図にみる 1850 年代の樺太 (サハリン) 島における先住民族と国家」『北海道・東北史研究』8: 24-56.
- 千徳太郎治 (1929) 『樺太アイヌ叢話』市光堂.
- 田村将人 (2017) 「20 世紀初めに記録された樺太アイヌの『父祖伝来の川』について」中川裕先生還暦記念論文集刊行会 (編) 『ひろがる北方研究の地平線 中川裕先生還暦記念論集』91-99. サッポロ堂書店.
- 東京大学史料編纂所編纂 (1972 [1922]) 『大日本古文書 幕末外交関係文書之十四』東京大学出版会.
- ドブロトゥヴォールスキー, M. M. (1996) 「アイヌ語・ロシア語辞典(3)」寺田吉孝 (訳) 『北海学園大学学園論集』86/87: 79-91.
- ドブロトゥヴォールスキー, M. M. (2018) 寺田吉孝・安田節彦 (訳) 「アイヌ語ロシア語辞典 (25)」『北海学園論集』177: 49-90.
- ドブロトゥヴォールスキー, M. M. (2019) 寺田吉孝・安田節彦 (訳) 「アイヌ語ロシア語辞典 (26)」『北海学園論集』178: 121-149.
- 服部四郎 (1961) 「アイヌ語カラフト方言の『人称接辞』について」『言語研究』39: 1-20.
- 服部四郎 (1969) 「はしがき—カラフト西海岸北部地名の共時論的研究—」佐々木弘太郎著『樺太アイヌ語地名小辞典』1-53. みやま書房.
- ピウスツキ, プロニスワフ (2018) 「樺太島の個別アイヌ村落に関する若干の情報」高倉浩樹 (監修)・井上紘一 (訳編・解説) 『プロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌—二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイльта—』205-258. 東北大学東北アジア研究センター.
- 檜皮瑞樹 (2006) 「幕末期樺太におけるアイヌ支配の揺らぎと再編成—トコンベ出奔事件をめぐる—」『史観』155: 18-35.
- ブッセ, ニコライ (2003) 秋月俊幸 (訳) 『サハリン島占領日記 1853-54』東洋文庫.
- 松浦武四郎 (1969) 「近世蝦夷人物誌」高倉新一郎 (編) 『日本庶民生活史料集成第四巻探検・紀行・地誌北辺篇』733-813. 三陽社.
- 松浦武四郎 (1999) 秋葉實 (翻刻・編) 『校訂蝦夷日誌 二編』北海道出版企画センター.

Information on Ainu speakers in “Ainu-Russian Dictionary” (Dobrotvorskij 1875)

Ryo SAKAGUCHI

(Doctoral Course Student at Graduate School of Humanities and Studies on Public Affairs, Chiba University / JSPS research fellow)

The purpose of this paper is to clarify the place of residence and personal history of the speakers of Ainu in the “Ainu-Russian Dictionary” (Dobrotvorskij 1875). Dobrotvorskij's descriptions about speakers are fragmentary, and most of the Ainu speakers' places of residence are not known. By comparing the sources from the same period, it is possible not only to clarify the Ainu speakers'

place of residence and migration, but also to enhance the potential of the dictionary as Ainu language materials. For example, other sources indicate that an Ainu man named *Kasituru*, who was close to Dobrotvorskij, lived in *Komosirara* near *Kusunnay* (currently Il'nskoe, Sakhalin Oblast, Russia) from the 1850s to 1876. However, *Kasituru*'s eldest daughter and son appeared in the census register of the *Usoro* district (currently Orlovo) around 1860. Other contemporary sources suggest that the eldest daughter and son moved to *Rayčiska* (currently Krasnogorsk) and then to *Ootuponi* (currently Orlovo). The accuracy of the description of the Ainu language in this dictionary will also help us to correct the Russian and Japanese records.

